

中日非言語行動の対照研究

—服装を中心に—

王 曉

キーワード

非言語行動 nonverbal communication

比較対照 comparison

服装 fashion

違和感 out of place

異文化コミュニケーション intercultural communication

妨げ obstruction

はじめに

われわれは日常生活において、相手の感情の状態や意図などを知るために、また自分の情報を伝えるために、「からだ全体」で総合的にコミュニケーションしている。言語は情報伝達にとって重要であるが、言語以外にも、表情、視線、身振り、姿勢、空間行動、身体接触、音声、化粧、匂い、服装など、

さまざまな情報伝達、すなわち、非言語コミュニケーションが考えられる。

服装など、言語とは何の関係もないように見えるかもしれないが、実は重要な非言語コミュニケーションである。その国の文化・習慣・社会状況に合った服装をすることによって、礼儀正しさ、教養の高さを暗黙のうちに自己提示することになる。逆の言い方をすると、場にそぐわないファッション、地位や立場にそぐわないファッションをするのは、見識のなさ、反抗心、または何か特別な主張があると取られてもしかたのないことかもしれない。

さらに服装は第一印象や相手との関係を伝え、感情を表現するなどの機能をもつ。さらには自己表現の手段として集団からの離脱・帰属を示すためにも利用される。非言語コミュニケーションには、同時性・状況依存性などの特徴に加え、文化的差異が大きいという特徴がある。同じ非言語手段がある文化と別の文化では全く異なるメッセージを伝えたり、一方の文化で何の意味ももたない行為が、別の文化では侮辱を表す行為と見なされることもあるのである。そういう状況を避けるためにも、非言語コミュニケーションの手段の一つである服装の中日差異をはっきりする必要があると思う。

1. 調査目的及び調査内容

(1) 調査目的

現代社会では、国際間の交通・通信・メディアなどの発達によって、各国の服装も国際化の傾向が強まってきている。中国・日本では、ほとんどの人は日常生活の中に、主流として洋服という世界共有の服を着用している。そして、同じ黄色人種であるため、外見上はほとんど区別がつかなくなっている。

しかし、中日両国は風土・歴史・文化の背景が違うので、衣・食・住などの生活要素に対しても、それぞれ重視の程度が違う。それに服装は、さまざまなメッセージを、それを見る人に伝えてくれる。グローバル化で異文化コ

コミュニケーションがますます盛んになっている今日、異文化誤解を防ぎ、円滑なコミュニケーションを行うためには、このような生活習慣の差異の実態を究明する必要がある。

本稿では異文化コミュニケーションの妨げになる服装の問題をいくつか取り上げ、中日両国の差異を明らかにしたい。

(2) 調査対象と調査項目

このアンケートは、2005年10月～11月にわたって実施、調査対象は大学生にした。中国側の調査対象は北京第二外国語学院に在学する18～22歳の学生100人で、性別は女性75人、男性25人である。日本側の調査対象は日本の大学に在学する18～22歳の学生100人(愛知学泉大学63人、名古屋大学37人)で、性別は女性23人、男性77人である。調査の項目は主に7つあり、1 制服、2 土足厳禁、3 衣替え・着替え、4 ドレスコード、5 違和感を覚える服、6 服装の役割、7 伝統的な服装である。

(3) 調査方法

A4の用紙に選択式の質問と自記記入式の質問を25問用意し、学生に配布し、回答してもらい、集まったアンケート集計する。そして集まったデータをそれぞれのジャンルにわけクロス集計を行う。

2. 制服について

制服とは、ある団体に属する人が着るように定められた服装。団体の特色や仕事内容別に機能性・デザイン面を重視して考案されている。また制服を身につけている姿は、誰しも業務に徹するプロの顔をしており、一般人には安心感をも与えてくれる。外国人から見れば、日本人はよく制服を着る。実態はどうだろうか。

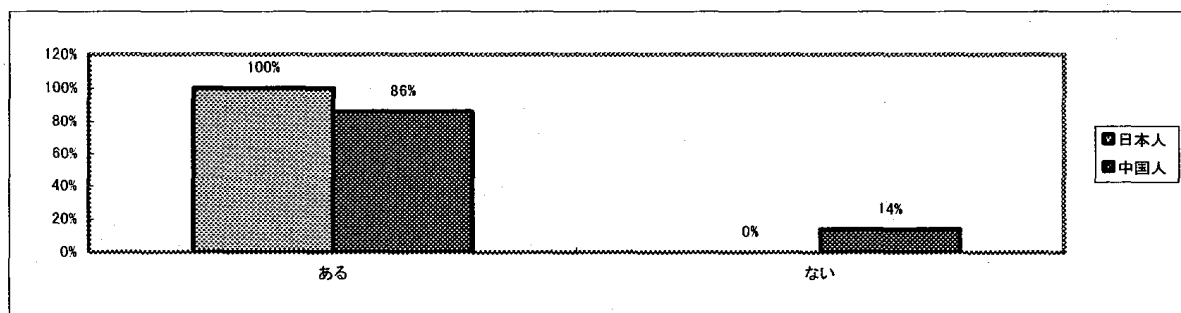


図1 制服の経験(中日比較)

図1でわかるように、調査に応じる日本人は一度くらい制服を経験した。それに対して、制服の経験のある中国人も86%で、かなり多い。というのは、最近中国では制服を導入する学校が多くなってきたからである。

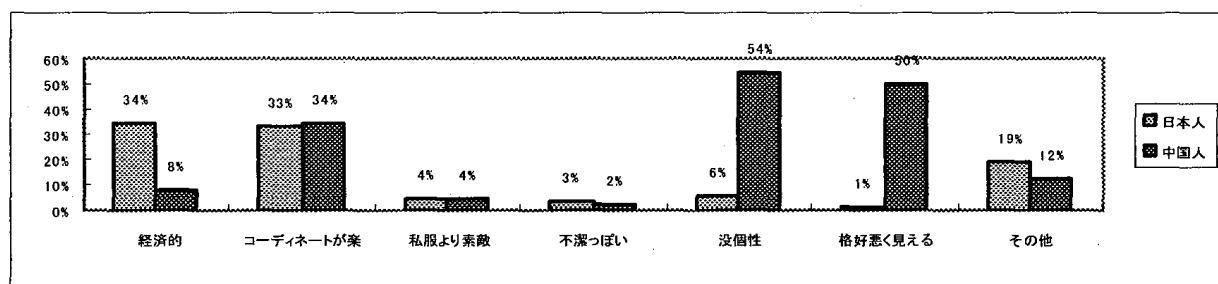


図2 制服についてどう思うか(中日比較)

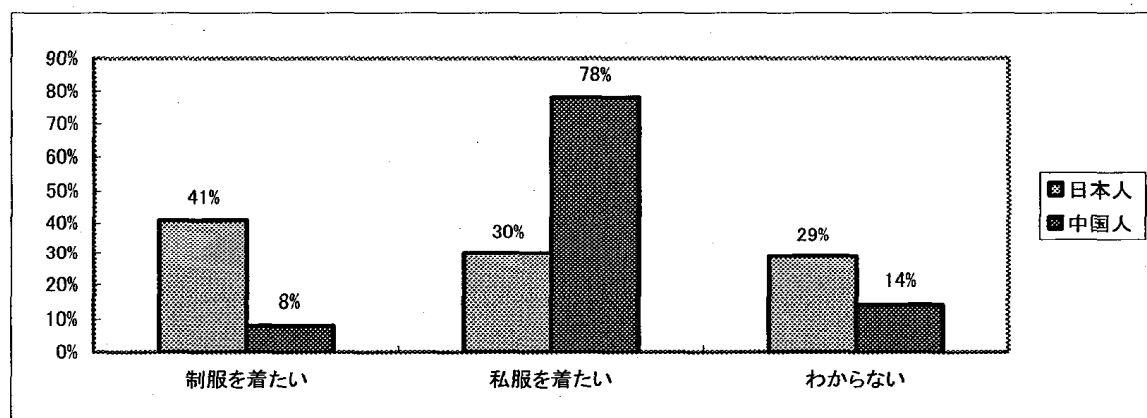


図3 学校で制服の着用が自由だったら、制服を着るか(中日比較)

「制服についてどう思うか」という問には、日本人は「経済的」(34%), 「コーディネートが楽」(33%)という回答が多かったのに対して、中国人は「個性がない」(54%), 「格好悪く見える」(50%)の回答が多かった。「制服の着用が自由だったら」という問には、日本人の4割が「制服を着る」と回

答し、3割が「私服で通学する」と回答した。一方、中国人の8割近くは「私服で通学する」と答え、「制服」の着用に抵抗感を見せた。

その原因は日本の学校の制服でも有名なデザイナーがデザインしたりすることにあるかもしれない。デザインがかわいいことで自慢に思う学生すらいる。中国では、学校の制服の多くはスポーツウェアで、当然かっこいい、かわいいとは無縁だ。それにほとんどの学校は毎日制服を着るのではなく、週に一回や学校の記念日に着るぐらいだ。

最近日本では「制服ファッション」という新語もある。女子高生の制服に似た私服を着こなすこと。私立女子高校の制服とそっくりな、チェックのスカートやベストなどを、小学生高学年の女の子たちが着用するようになっている。デザインはお嬢様風の女子高生といった感じで、上下で1万円程度。デパートでの買い物やピアノ発表会などのときに「よそ行き」として着ている。

日本では社会人になっても、制服とは縁が切れない。職業によっては男女問わず制服がある。その仕事を周囲の人に認識させなければならないという職業上の理由から来ることが大半だろう。現在、業界によっては背広を着なくてもよい職場もある。しかし、通勤電車に乗れば一目瞭然のように、サラリーマンの場合ほとんどは背広に身を包んで、ネクタイを締めている。全員が同じ色柄のスーツやネクタイではないにせよ、ダークカラーの無地のスーツに白または淡色のシャツは、遠目にはまるで制服のように映る。男性の背広は社会規範の表現といってよい。

3. 「土足厳禁」について

日本では食事に行っても、座敷になったお店では靴を脱がねばならないし、神社やお寺を拝観するのに靴を脱ぐのも珍しいことではない。さらに病院や学校では、スリッパや上履きに履き替えなければならないところも少なくな

い。多くの人が入り出る公共の場所でも、「土足厳禁」の注意書きはよく見かける。

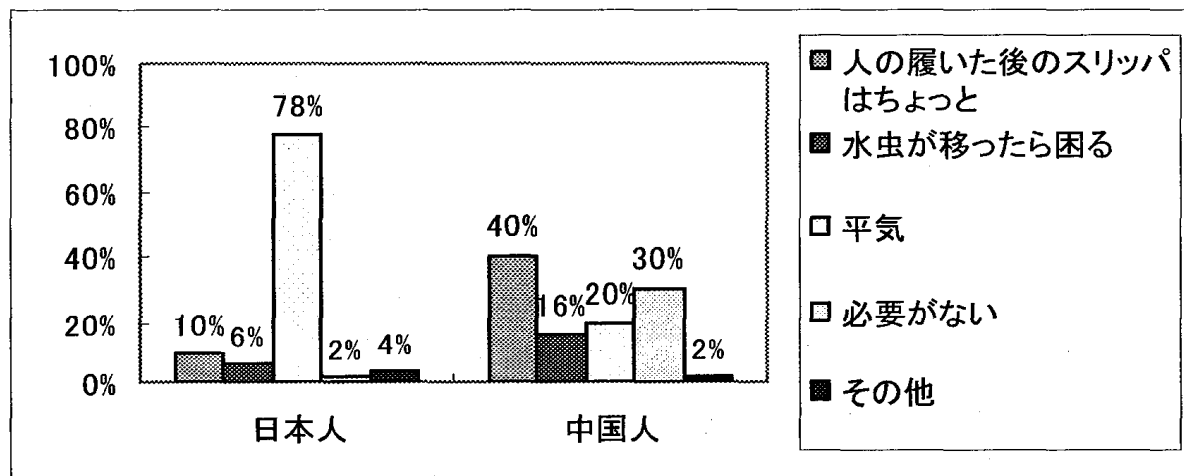


図4 スリッパをどう思うか(中日比較)

「スリッパをどう思うか」という質問に、8割近くの日本人が「平気」だと思っているのに対し、中国人はわずか20%だ。そして中国人に多い答えは「人の履いた後のスリッパはちょっと(履きたくない)」40%と「必要がない」(30%)だ。両者の間に大きな差異がある。

日本に来てすぐ気づいたことは、日本人がスリッパ好きだということだった。誰が履いたか分からないようなスリッパで、時には古くて汚くなったものもあり、何だか気持ちが悪い。外国人の中には慣れなくて、いつも自分のスリッパをバッグに入れて持ち歩くことにした人もいる。靴を脱ぐことの多い日本では、靴下のどこかに穴があるかどうか気になって、靴下を一足余分に用意して雨などが降ったらお客さんの家へ入る前に履き替えるサラリーマンもいる。中国では「スリッパ」は、正式な場や仕事場では不真面目、いい加減、だらしがないと思われる。仕事場では履けない。日本の学校は玄関でスリッパに履き替えて教壇に立つことが多い。正装にスリッパの教員たちの姿、制服にスリッパの学生の様子もとてもおかしく感じ、真面目なはずの学校の雰囲気スリッパによって崩されてしまったような気もした。

なぜ何でも真面目で、会社でスーツ・ネクタイをきちんと決めている日本人が、スリッパを仕事場で履けるのかと、考えてしまった。決して日本人が

スリッパを正装だと思っているわけではないと思う。正式な場では、あるいは自分の所属以外の公的な所では、スリッパを履かないからだ。

日本人はよく「うちの会社」と言う。つまり、「会社＝ウチ」という意識を持ち、多くの日本人にとって自分の生活の中心は会社だ。そのため、日本人は強い所属意識を持つようになった。日本人の自己紹介の台詞は、このような所属意識をはっきり表している。「初めまして、〇〇〇〇のWです」のように、名前の前に必ず自分の所属を言うのが特徴だ。中国やアメリカ、他の多くの国はこのような所属付きの自己紹介をしないようだ。だから、仕事場は日本人にとって公的な場所でもあり「私」的な場所でもある。公的な場所だからスーツにネクタイのような正装をし、「私」的な場所でもあるから家にいるようにスリッパを履くのである。

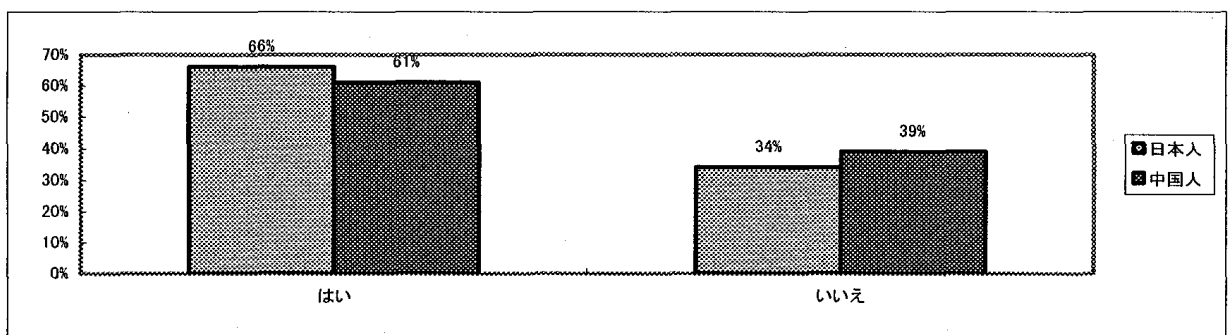


図5 家にお客さんが来る時、靴を履き替えてもらうか(中日比較)

日本は夏は高温多湿、冬は低温低湿の気候であるが、冬の寒さよりも夏のむし暑さの方が深刻である。従って、日本の住居様式や服装様式などは、むし暑さに対処する機能を優先的に発達させてきたのである。昼の家、靴を脱ぐ習慣、草履や下駄の使用なども、防暑防湿機能を発揮したものである。日本人の家は今でもまだ昼の家が多い。だから、家に入るときは靴を履き替えるのではなく、脱ぐ人が多い。「いいえ」と答える日本人のほとんどの理由は「家の中は靴を履かない。脱ぐのだ」。

日本人はまた玄関で靴を脱いだ後、靴をそろえる習慣がある。中国はあまりそういう習慣がないので、そろえない人もいる。日本人には失礼だと思われることもあるらしく、そういう所がやはり文化の違いとしか言いようがな

いだろう。畳の上で暮らす伝統的な日本家屋に対して、寝る時以外は家の中でも靴を脱がない暮らしが中国では普通のことだ。経済的に豊かになるにつれ、中国の人々の住まいも変わり始めた。それまでコンクリートが打ちっぱなしにされていた床は、タイルや木の床に変わり、靴を玄関でスリッパに履き替えてから部屋に入る家も増えてきた。

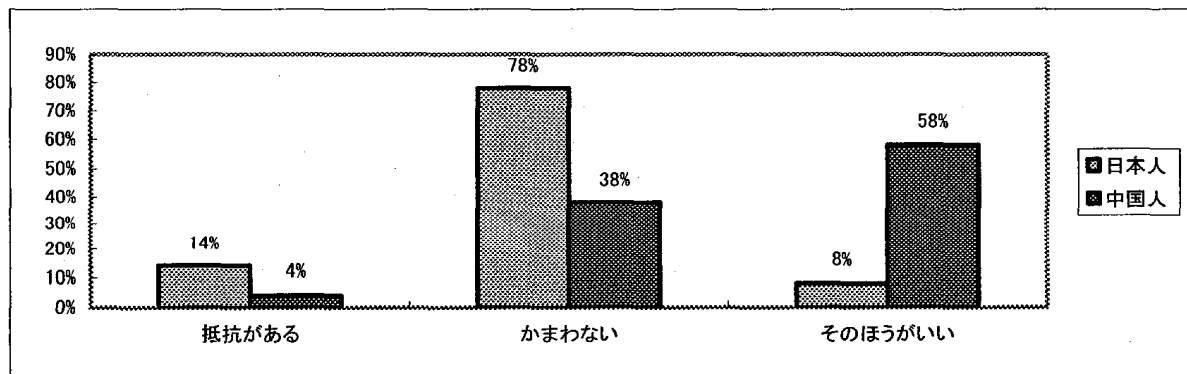


図6 他人の家を訪問時、靴の履き替えどう思うか(中日比較)

「他人の家を訪問時、靴の履き替えどう思うか」という問いに対して、「かまわない」と答える日本人が多いのは、やはり「家の中は靴を脱ぐべきだ」と思う人が多いからだ。中国人はあまり靴を脱ぐ習慣がないから、「郷に入っては郷に従え」だから、他人の習慣を尊重して主人側が用意したスリッパに履きかえる。最近中国の住宅事情が改善してきて、玄関でスリッパに履き替えてから入る人が多くなり、自分の家でもそうするから、他人の家を訪問するとき自然にそうするようになるのだ。

4. 衣替え・着替えについて

日本では、季節の変わり目に、これから着る服を出し、着なくなる衣服をしまうことを「衣替え」という。6月1日頃と10月1日頃がその時期であり、学校の制服や警察官の制服なども、この時にそれぞれ夏用、冬用に切り替わる。

中国でも、その時々気候に合わせて衣服を調整するのだが、日本の「衣替え」みたいに、一斉切り替わることがない。それぞれの状況にあわせておしゃれを楽しむ人が多い。

日本人は毎日服を着替える人が多い。日本のドラマで何度か見たように、着替えないと変に思われることさえある。それに対して、中国人はかなりばらつきで、着替えなくても別に誤解を招くことがないようだ。

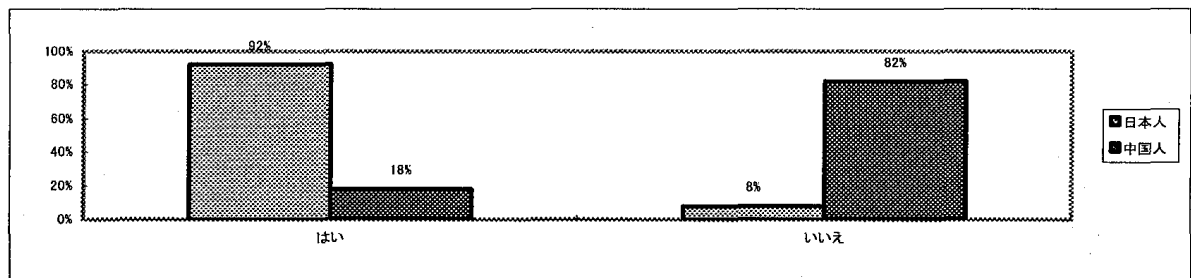


図7 毎日服を着替えるか(中日比較)

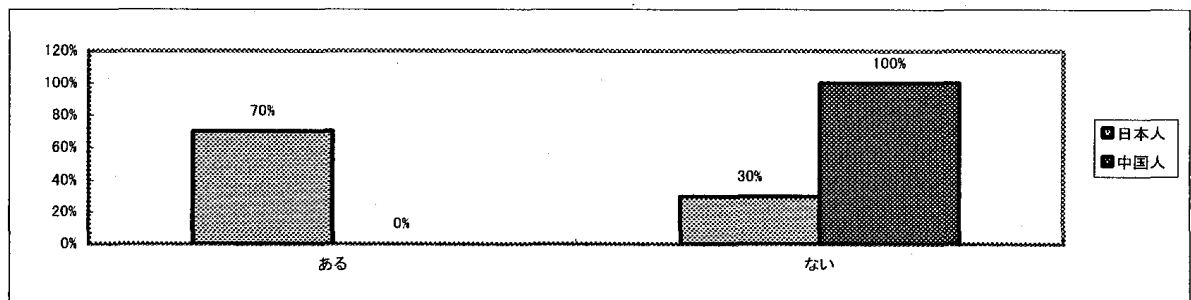


図8 着替えないと、誤解されたことあるか(中日比較)

現在の日本も個性を強調すべく個人主義を推し進めているようにみえるが、暗黙にはやはり集団主義を押し付けているのではないだろうか。

例えば衣類、お葬式には黒い服を着る、就職活動は紺・グレー・黒のスーツで、などなど。この常識に従わない人は「変わった人」か「常識のない人」ということになる。

「クールビズ」(ノーネクタイ・ノー上着のサラリーマンの軽装)は日本の2005年の流行語にもなった。しかし、普段背広にネクタイのサラリーマンがクールビズで家を出ようとしたら子供に「遊びに行くの?」と聞かれたこともあるらしい。営業の現場など、「ネクタイは公私の区別をつける。はずすの

はまだ少し抵抗がる」との声もある。

5. ドレスコードについて

ドレスコードとは、服装指定のこと。周囲の雰囲気損なわないために、場所や時間帯に合わせた服装をする。正式なパーティーなどに多い。大学キャンパスの主役である教師と学生に対してドレスコードがあるのだろうか。アンケートの結果は以下のようだ。

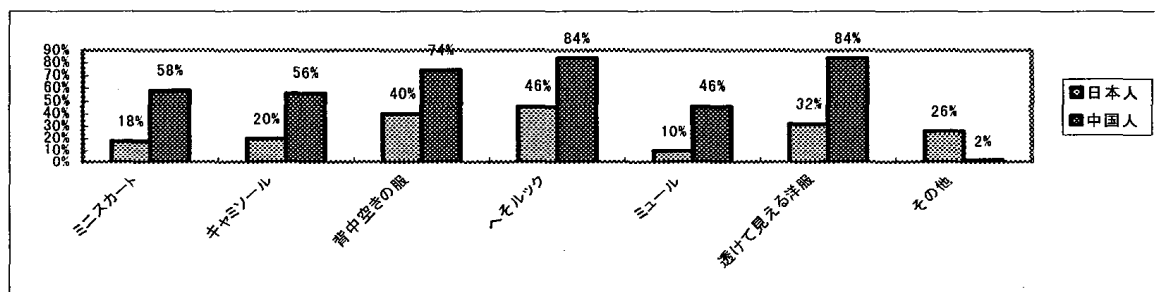


図 9 教師が着てはならないもの(中日比較)

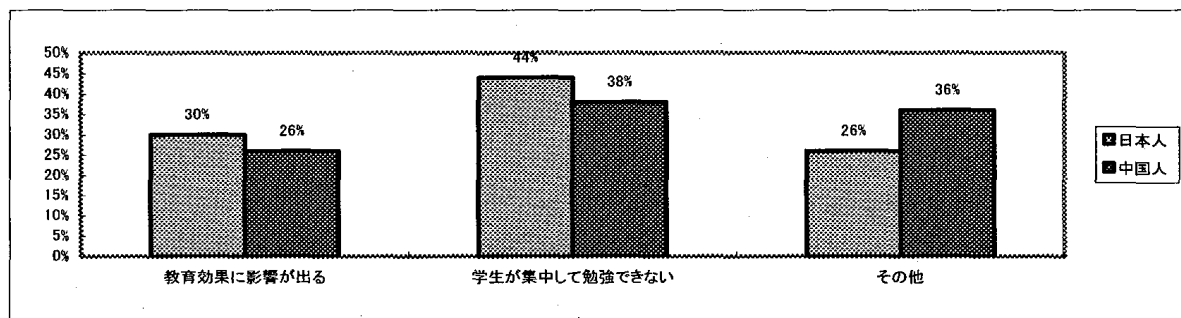


図 10 その理由(中日比較)

教師の服装について、中国の学生は日本より厳しいような印象を受けた。図 9 で挙げたような服装は教壇に立って物事を教える教師にはふさわしい服装とはいえないと考える学生が多い。教師にはやはり「時と場所に合った教師の服装を」ということだ。

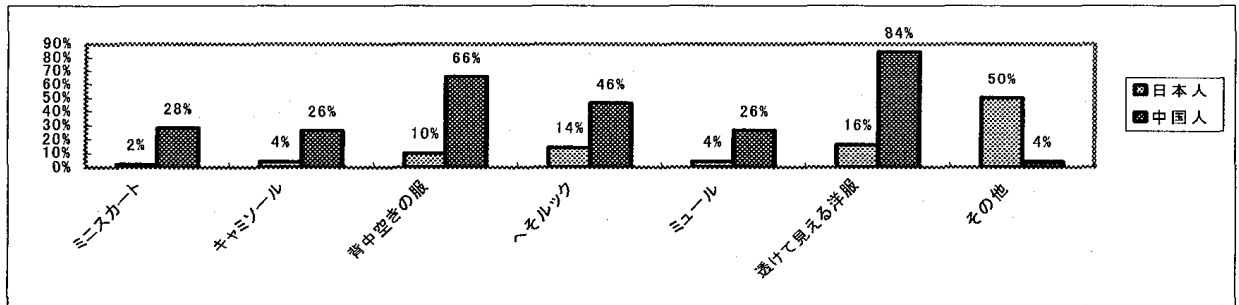


図 11 学生が着てはならないもの(中日比較)

「学生が着てはならないもの」もすべてのアイテムにおいて、中国人の学生の比率が高く、服装に対して厳しいようだ。特に「ヘソルック」(46%)、「背中空きの服」(66%)、「透けて見える洋服」(84%)など露出の多い服ほど反感が高い。一方、日本人大学生の半分は「その他」を選んだ。「その他」の詳細を見ると、「どれでもいい」ということだ。すなわち「服装は基本的に個人の自由に属するものだ」と主張するのだ。

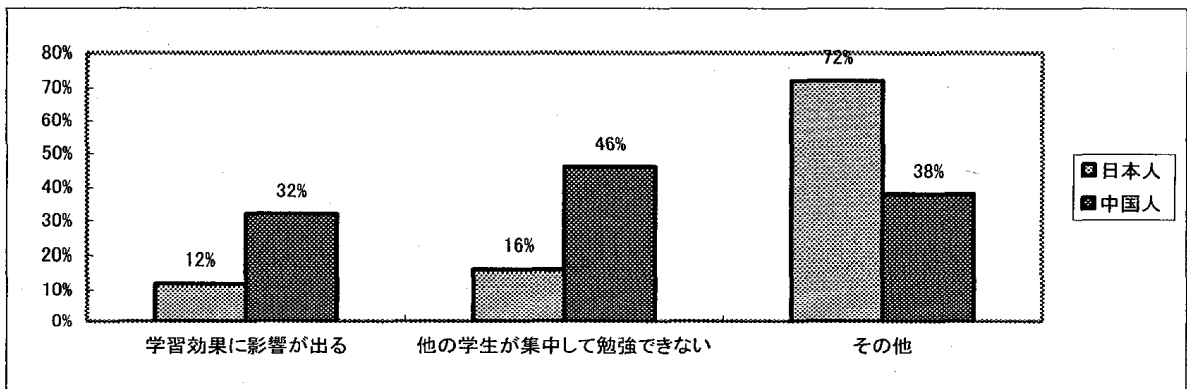


図 12 その理由(中日比較)

「学生が着てはならないもの」の理由を聞いたところ、7割を超える日本人大学生は「その他」を選んだ。「以上挙げたアイテムは何でもいいと思うから」、つまり学生は何を着ても個人の自由だから、干渉してはいけないようだ。確かに、日本の大学生のファッションは中国人の学生に比べたら、もっと大胆で何を着てもいいようだ。中国人の学生はもっと「学生らしさ」を重視していて、学生の身分に合った服を着たほうがいいと思われる学生が多い。

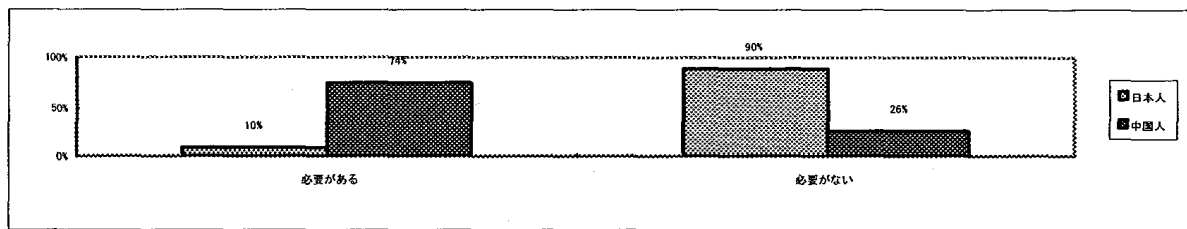


図 13 ドレスコードの必要性

「学校ではドレスコードの必要があるか」という問いに対して、9 割の日本人学生が「必要がない」と主張する。日本人学生には「服装はプライベートのこと、構わないでほしい」という意見が根強い。一方、8 割近くの中国人学生が「必要がある」と主張する。実際、中国の大学では「キャミソール」や「ミュール」など露出度の高い服を着てはいけない服装規制があるのだ。

では大学のキャンパスで、大学生は一体どんな格好をしているのだろう。

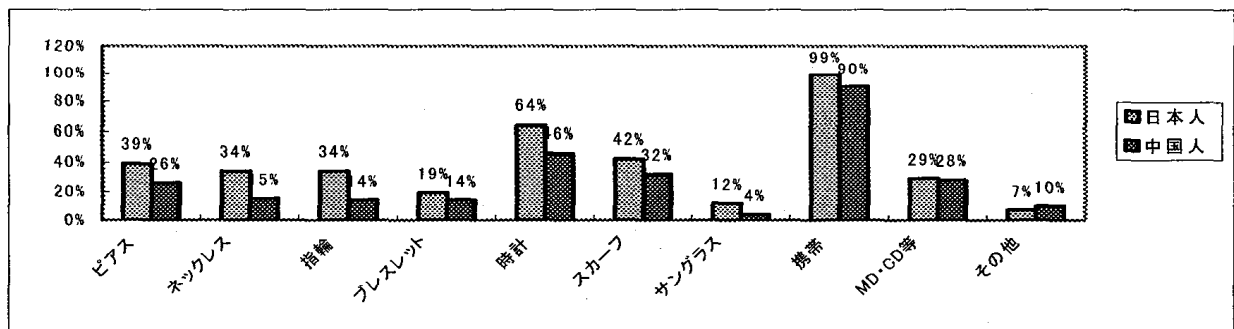


図 14 大学にこれらのものを持っていくか(中日比較)

アンケートの結果を見てみると、ほとんどの人が携帯電話を持っていることがわかった。自由でカジュアルな格好を楽しみながらも、社会人への準備を考えている様子も見えてくる。

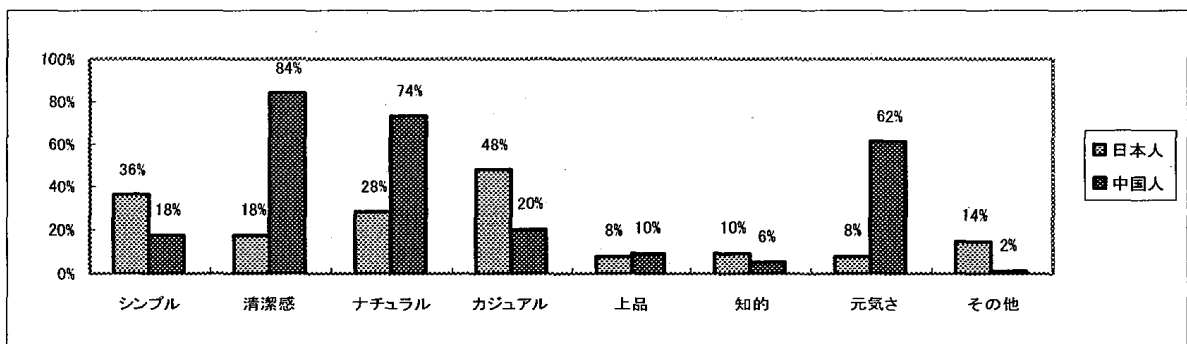


図 15 通学時のファッションで心がけること(中日比較)

日本の大学生がもっとも重視するのは「カジュアル」(48%)で、その次は「シンプル」(36%)なのだ。一方中国の大学生が「清潔感」(84%)、「ナチュラル」(74%)、「元気さ」(62%)の順で、両者の間には大きな差が見られる。中国の大学生が「学生らしさ」を重視する傾向があるのに対して、日本の大学生は「リラックス」のかっこうを好むようだ。でも、就職活動になると、誰でも油断できない。「面接に着ていきたい服」という質問に対して、両国とも90%以上の学生が「スーツ」と答えた。

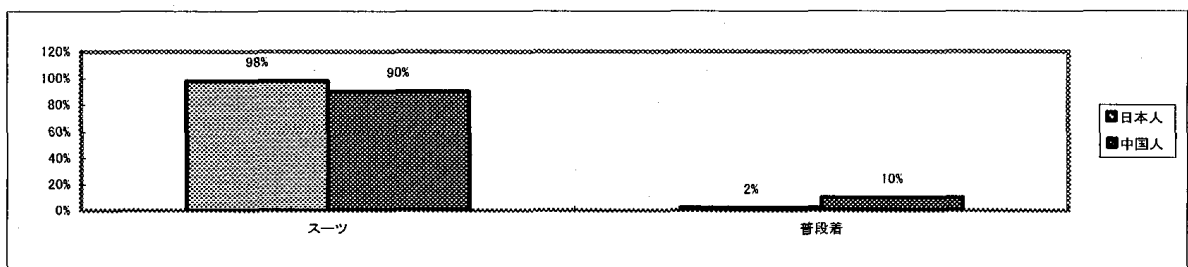


図 16 面接に着ていきたい服装(中日比較)

スーツといっても、日本では専らリクルートスーツと指す。すなわち学生が就職活動の際着用するスーツ。雪解けの春頃になるとどこからともなく姿をあらわし、夏をピークに同じスーツを着たサイボークたちが街に溢れ出す。学生時代には「茶髪」で過ごしていた彼らもこの時期ばかりは髪を黒く染め直し、別人に生まれ変わる。

6. 違和感のある服装について

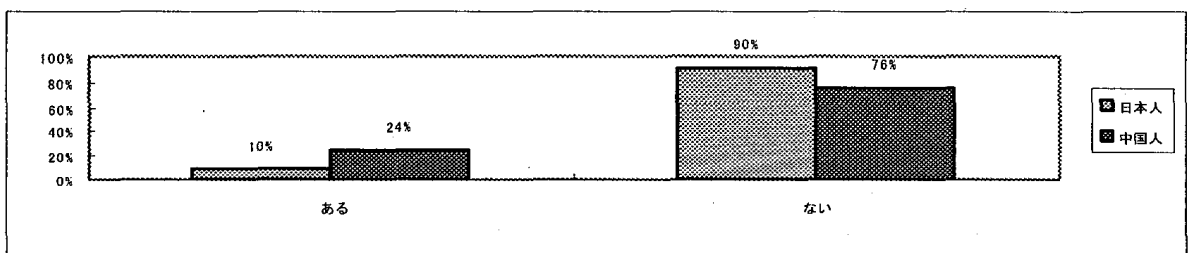


図 17 相手の国の服装を見て、違和感を覚えたことがあるか(中日比較)

アンケートを受けた学生の中で、相手国に行ったことのある人は少数だ。日本人は8%で、中国人は12%である。日本人に「中国人の服装を見て、違和感を覚えたことがありますか」を聞くと、9割の人が「ない」と答えた。「ある」と答えた人にさらに「どんな服装ですか」と聞いたら、「人民服」や「パジャマ姿のおばさん」または「上半身裸のおじさん」、「スカートに短い肌色のストッキングを履く」などが挙げられた。それに黄砂の時期到北京などで見られる透明なスカーフを頭にすっぽりかぶった女性の格好も日本人の目には奇妙に映るようだ。一方、中国人に「日本人の服装を見て違和感を覚えたことがありますか」と聞いたら、7割の以上人が「ない」と答えた。「ある」と答えた人にさらに「どんな服装ですか」と聞いたら、「武士道の服」、「大げさな服」、「汚そうに見える服」、「ゴスロリのような服」などが挙げられた。

日本では室内でのコート、着帽は失礼になる。以前ある日本人の先生から言われたことがある。中国人の知り合いで、頼み事をしに来て、研究室にいる間中コートを脱ごうとしない人がたまにいる。この程度ならまだしも、一部の留学生に至っては、コートを着たまま授業を受けるようなありさまで、まったく目に余る。確かに中国人は、部屋に入るのにコートを脱ぐか脱がないかについては、あまりやかましくない。日本では、人のお宅に伺う時、コートは玄関に入る前に脱いでおくもので、そうしないとマナー違反になってしまうのだ。中国では人のお家にお邪魔をしても、長居する気がなければ、コートを脱がないことがしばしばある。

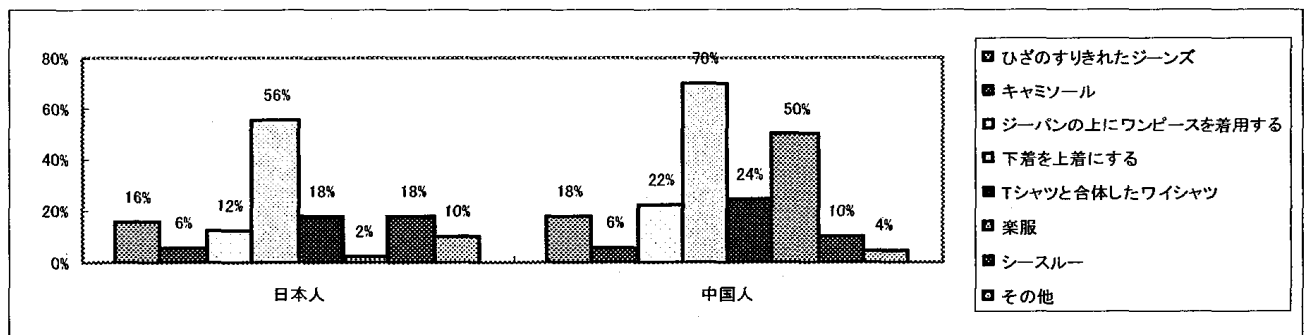


図 18 違和感のある服(中日比較)

ミスマッチという言葉がある。「不釣り合いな組み合わせ」という意味。本来ならば、ネガティブな言葉なのだけれど、ファッションに於いてはその新しい(時には珍奇な)組み合わせが一つの流行として受け入れられる。その中の「下着を上着にする」・「ジーパンの上にワンピースを着用する」・「TEEシャツと合体したワイシャツ」を選択肢に入れてみたが、結果は以下のようだ。「下着を上着にする」を選ぶ人の比率は両国とも一番高い。「楽服」も新語で、若い女性の中に広がっている、だぶだぶ服の重ね着や、ゆるいパンツ、無造作な帽子などのファッション。いわゆる、体の線の出ない、ゆるく楽ちんでデコラティブ(装飾的)な服のことである。Tシャツやタンクトップを何枚か重ね、ゆるいパンツをはく。スカートと重ね着することもある。靴はヒールのない底がぺったんこのもの。頭には昔の中年男性のような帽子をかぶり、肩には大きなバッグかリュックをかける。従来のように「気合いの入ったかつこう」をしたくない女の子たちのファッション。「楽服」を選ぶ中国学生の比率が高い。それは中国語に訳す時、ぴったりの言葉がなくて「过于宽大的服装」と訳しただけで、意味があまりはっきりしていないからかもしれない。

「違和感のある服」という質問に対し、ほとんどすべての選択肢において中国人の比率が日本人を上回る。中国の大学生はやはり日本人学生より珍奇なものは受け付けないという保守的な気持ちがあるだろう。

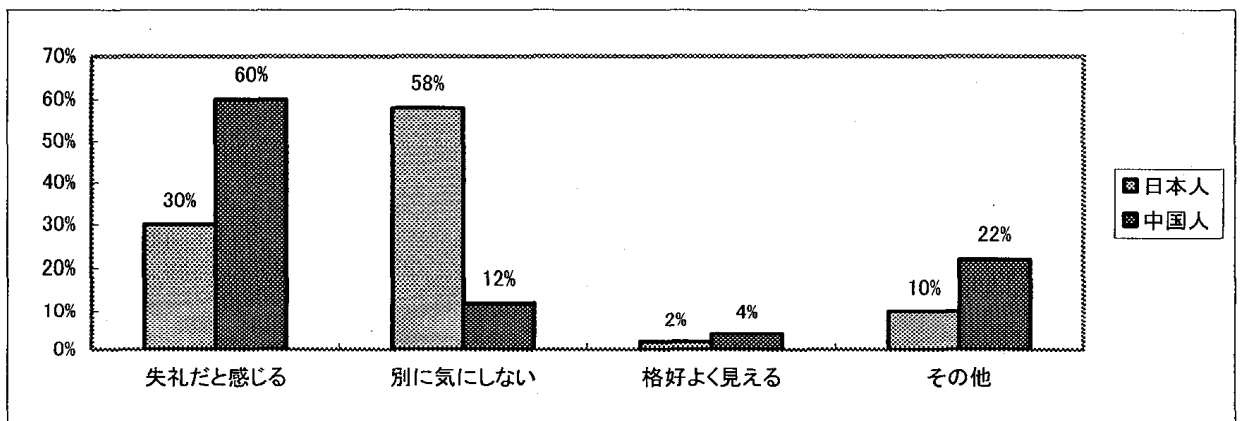


図 19 室内のサングラス着用についてどう思うか(中日比較)

日本のテレビを見ると、バラエティー番組で時々サングラスのままで出る芸能人がいる。それを見てやはり違和感がある。それについてのアンケート結果は日本人の6割近くが「別に気にしない」と答えるが、中国人の6割は「失礼だと感じる」だ。考えに大きな差が見られる。

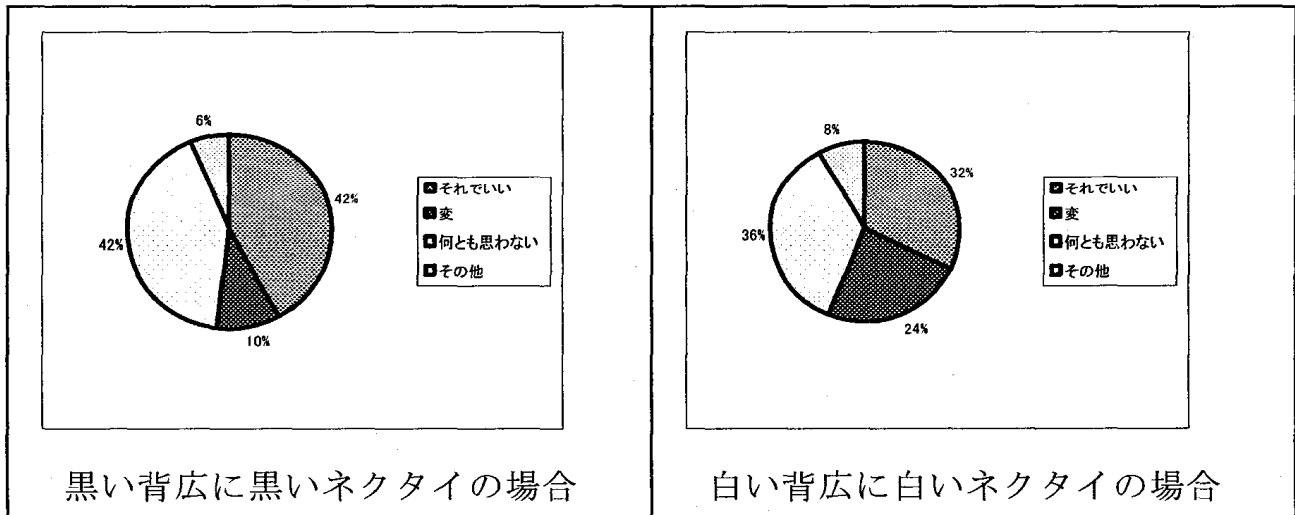


図 20

日本人に「中国では、レストランの案内人がよく黒尽くめの服(黒い背広、黒いネクタイ)を着ているが、どう思いますか」という質問を聞いてみた。「それでいい」と「何とも思わない」は合わせて84%で、変に思わない人が多い。しかしそれを「白い背広に白いネクタイ」にしたら、「変」だと思う人の比率が高くなり24%になる。最大の理由は「結婚式みたいだから」なのだ。

7. 服装の役割について

アメリカの学者ケイコ・カウチの報告によると、第一印象は初対面から7～30秒の間に決まってしまうそうだ。この、「一瞬間」とも言うべき短い時間に相手に伝えられるパーソナリティ情報は非常に限られたものにならざるを得ない。

また、アメリカの学者アルバート・メラビアン博士によると、第一印象の決定要因は「容姿・容貌・服装」が55%、「雰囲気・立ち居振る舞い」が38%、

そして「話の内容」が 7%であるという。これが有名な「メラビアン法則」である。容姿・容貌・服装あるいは雰囲気や立ち居振る舞いは言わば「見た目」の部分であり、つまり第一印象はその人の内面性とは直接関係ない「外見的な」要素によって 90%以上支配されるということになる。このことの良し悪しを論じてあまり意味がない。ほとんど一瞬のうちに、見た目の要素で第一印象が決まってしまうのは事実なのだから、それを受け止めて第一印象をよくするために外見的要素に気を配ろうとすることが、この際選ぶべき途ではないだろうか。そのことを実際中日の大学生がどう思っているのだろうか。

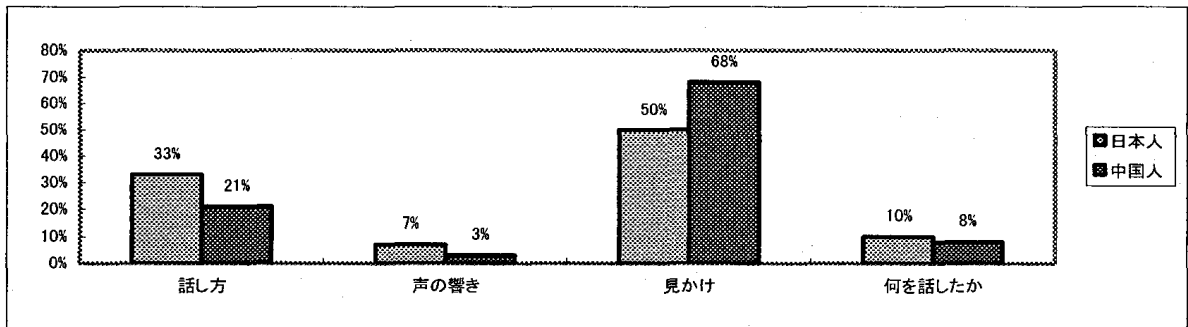


図 21 その人の印象を作り出しているもの(中日比較)

第一印象を決めるのに、一番高いポイントを上げているのがやはり外見だ。その人その人のイメージ作りにファッションは大きくかかわっている。

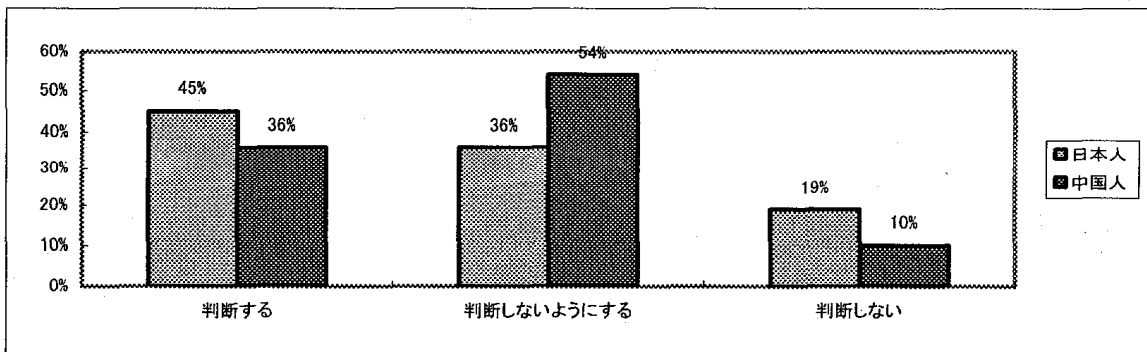


図 22 外見で人を判断するか(中日比較)

「外見で人を判断するか」について、日本側は「判断する」人がもっとも多く、45%である。一方、中国側は「判断しないようにする」人の方が多い。ちょっと意外な結果となっている。

服装の機能について考えるとき、暑さ寒さから身体を保護するという働きの他にもう一つ、忘れてはならない重要な役割がある。服装は、人間同士のコミュニケーションをインターフェイスしているのだ。「今日は大事な人と会うのだが、このかっこうで大丈夫かな？」などと考える習慣は、着る物で印象を悪くしたくないという思いの表れといえるだろう。それはまた、服装がコミュニケーションに与える影響を無意識のうちに自覚している証拠とも言える。

「一張羅」という言葉がある。現代で言えば「勝負服」だろうか。こ一番の気合を一番いい服に込める。これはれっきとしたビジュアル戦略であり、服装はノンバーバル（非言語）コミュニケーションツールとして機能するのである。

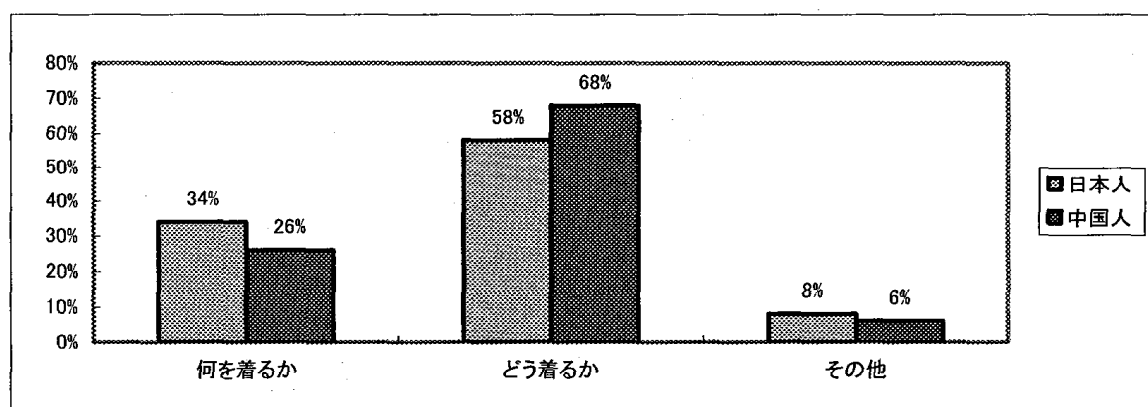


図 23 どちらが大事(中日比較)

「何を着るか」と「どう着るか」どちらが大事という問いに対して、中日の差があまり見られない。「どう着るか」を選ぶ人の比率は日本側も中国側も高く、それぞれ 58% と 68% である。服装がメッセージツールとして機能するのであれば、それを使いこなすためのスキルが必要だ。どんな場面で、どんな服を、どのように着るのか。これらを考慮して整えた服装は、時として百千の言葉よりも雄弁にその人を語る。服装はコミュニケーションツールであり、服装術は立派なビジネス能力なのである。総じて言えば、「服装の役割」について、両国は同じであるので、傾向として同じように考えられると思う。

8. 伝統的な服装について

日本女性の着物姿はどの国へ行っても珍しがられるそうだが、日本国内においても、そういった事情はあまり変わらなくなっている。女性に限らず現代の日本人は洋服が一般的で、着物を日常的に着るのはお茶、お花といった日本の伝統芸能のお師匠さんや落語家、力士などの特殊な職業の人に限られ、あとは結婚式・成人式・正月などの儀式に着る装飾的なものになってしまっているためだ。したがって、自分で着物を着られる人も少なくなり、若い女性の中には「嫁入り修業」の一つとしているぐらいである。

一年中伝統的な祭事が絶えない日本は、まさに「祭り」の国である。全国的に有名なお祭り以外にも、それぞれの地方には必ず特徴のある伝統的な祭りが残っているようだ。普段現代的なファッションに身を包んでいる若者たちでさえ、祭りになると浴衣や伝統的な装束を身につけ、祭りの主役になる。

ところで、中国人の服装と言うと「人民服」と「チャイナドレス」を真っ先に思い浮かべる人が多いと思う。かつてほとんどの人が着ていた人民服は、今では農村部のお年寄りが着ているぐらいで、街ではすっかり姿を消してしまった。

一方、「チャイナドレス」は伝統的な中国服とされている。でも日本と同様、日常生活の中で、「チャイナドレス」を着る人が少ない。2001年、ニューヨーク同時多発テロ事件後の警戒態勢の中、上海でAPECの首脳会議が開催された。この時、各国首脳が「唐装」で歓談する様子が世界中に伝えられたことから、中国国内でも伝統的な「唐装」への関心がさらに高まってきた。結婚式に新婦がウェディングドレスとして着る真っ赤なチャイナドレス、イベント・パーティに出席する際の正装礼服、パンツに合わせて着るカジュアルなスタイルのもの、ミニスカートタイプのものなど各種あり、現代ファッションの一つとして中国の女性たちに愛用されるようになった。

現代中国の服装、特に若い人たちの普段の服装は日本とほとんど変わらない。女性はファッションに敏感で日本や香港などのファッション雑誌を購入

し、研究をしている人も多いようだ。外資系百貨店が次々と進出し、各店舗にはファッション関係の専門店も数多く入っていて、週末にはショッピングを楽しむ家族連れや恋人同士で店の中はいっぱいになる。若い人たちを中心としたファッションは日に日に日本や西洋のようにカラフルな要素を多分に含んできた。

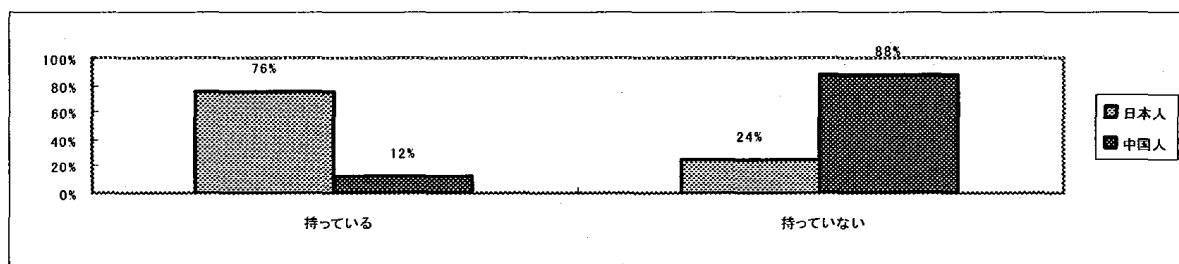


図 24 伝統的な服装を持っているか(中日比較)

アンケートの結果で分かるように、伝統的な服装を持っている日本人の割合(76%)が中国人(12%)よりはるかに高い。振袖、浴衣、はっぴ、はかまなどを持っている。一方、中国人の場合はやはり「唐装」だ。それから中国は多民族の国で、56の民族が居住し、少数民族の人はその民族の民族服を持っている。

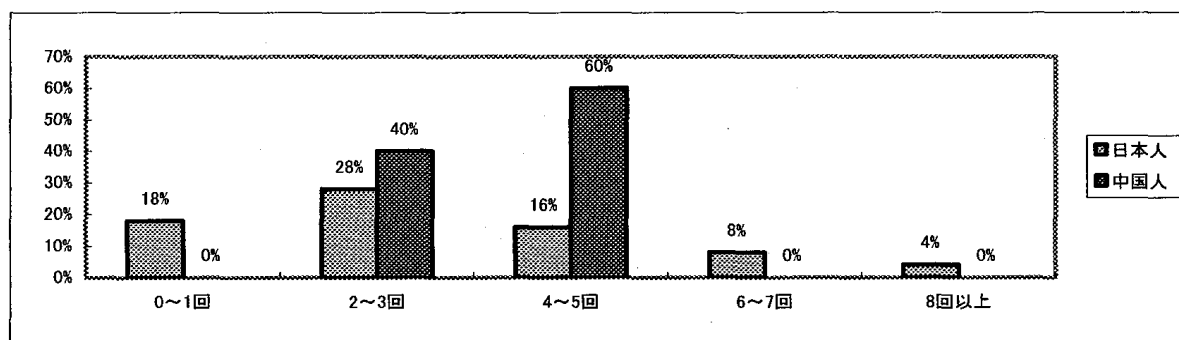


図 25 伝統的な服装を着る回数(中日比較)

中国人は普段の生活の中であまり服装を重視していない。だから、冠婚葬祭の時でも普段着で行く人が多い。伝統的な服装を着る回数も日本人に比べて圧倒的に少ない。

最後に結婚式の服装の色について述べたい。日本では結婚式に招待されたら、お客さんは少し落ち着いた色を着ていく。本来黒は慶事には着用しない

が、最近は黒い服を着る女性も多い。つまりあまり派手すぎるといけなく、花嫁さんより目立つと良くない。しかし中国では、結婚式に招待させた人の服装は明るい、派手な色を選んで着る。お客さんが派手な衣装を着て、新郎新婦と一緒に盛り上げる。逆に黒い色は一番いやなのだ。

おわりに

今回は、アンケート調査の結果分析によって、異文化コミュニケーションの妨げになるような服装の問題について考察を試みたが、今後のためにも改善すべき点が多々あった。

まず正確な結果を得るためには、均等な人数を対象にするということである。今回の中日大学生の男女比が全然違ってしまい、必ず正確な結果を出したとは言えない。

次に問題だったのは、選択肢の明確性である。誰でもはっきり分かる選択肢を設けることが大切だということがわかった。選択肢の内容があいまいであることにより、結論があいまいになってしまったのである。今後正確な結果を出すためには選択肢が明確であり、答えやすい質問をすることが重要であるとわかった。

今度実施したアンケートの結果はいままでの印象とはかなり異なった結果となっているが、その変化にはどんな背景が働いているのか、それは異文化コミュニケーションとどのように、そしてどこまでかかわっているのか、これらの問題は今後の研究課題として考えていきたいと思う。

注：この研究は SM200510031001 北京市教育委員会 2005 年度人文社会科学計画面上項目「中日非言語行動の対比研究」に属す。

参考文献

- 田仲邦子 『これがわかれば日本通 風俗日本語事典』 1999 ひらタイブックス
- 金文学 『裸の三国志 日・中・韓三国比較文化論』 1998 東方出版
- 黒澤明夫 『見てわかる日本 生活・社会編』 2003 JTB
- 狐野利及 『続 比較文化入門 衣食住から宗教まで』 1998 北星堂書店
- 陶坊資 『ここが違う！日本と中国 二つの母国の生活体験』 2001 蒼蒼社
- 王少鋒 『日・韓・中三国の比較文化論 その同質性と異質性について』 2000 明石書店
- 岩井紀子・佐藤博樹 『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』 2002 有斐閣
- M.L.パターソン 『非言語コミュニケーションの基礎理論』 1995 誠信書房
- 奥田寛 『中国人の非言語コミュニケーション』 1997 東方書店
- 大田垣晴子 『日用服飾事典』 2002 株式会社メディアファクトリー
- 東樹正明 『日本タテヨコ』 2004 学習研究社
- 水谷修ほか 『日本事情ハンドブック』 1995 大修館書店
- 古田暁ほか 『異文化コミュニケーションキーワード』 2001 有斐閣
- 横田尚美 『ファッションを考える』 2003 丸善株式会社